



ラブレールとモンテニューにおける他者認識

| | |
|-------|--|
| メタデータ | 言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-08-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 鍛治, 義弘 メールアドレス: 所属: |
| URL | https://doi.org/10.24729/00006259 |

ラブレールとモンテーニュにおける他者認識

鍛 治 義 弘

通常個人にとって自己—他者の区別があるように、一つの社会、共同体も何らかの基準によって自己ならざるものを区別し、他者として位置づけている。封建制を政治・経済体制とし、キリスト教によって精神的に結びついていた中世西ヨーロッパ社会にあって、こうした他者は、西ヨーロッパ内にあっては、ユダヤ人や、ライ病者に代表される病者であり、西ヨーロッパ外にあっては、異教徒としてのイスラム教徒や、大司祭ヨハネに代表される、極東に住むと想像されていたキリスト教徒などであったようだ。¹⁾

しかし、以上の他者のイメージは、1492年を境として大きな変化を受けたに違いない。この年、クリストバル・コロソ Cristóbal Colón (コロンブス) 自身が記しているように、²⁾ グラナダからモール人が追い払われ、エスパーニャからユダヤ人が追放された。そして何よりコロソの「アメリカ」到達によって、それまで直接的交渉のなかった「インド人」との接触が始まり、アメリカがヨーロッパ古典古代にとって未知であった「新」大陸であると判明すると、全く未知の「もの」に接することになり、人間の観念さえ変わりかねなかったからだ。こうした接触は、1500年代初期にあっては、コロソを送り出したエスパーニャ人やポルトガル人によって、主に行われていた。イタリア戦争などのために、新大陸探検でイベリヤ半島の国に遅れをとっていたフランスでも、1524年のヴェラツァーノ Verrazano の航海からようやく官民一体になって航路拡大への気運が高まった。³⁾ このような西ヨーロッパ、フランスの新大陸との接触の拡大によって、新たに発見された他者は、当時のフランス文学作品にも何らかの影を落としているはずである。以下の本論では、エスパーニャ人達の新大陸住民との交流の歴史をも考慮にいれながら、フランスにあって16世紀の前・後半それぞれを代表する散文作家、フランソワ・ラブレール François Rabelais の作品とミッシェル・ド・モンテーニュ Michel de Montaigne の『エッセー』の中に、この新しい他者の像を追ってみることにしよう。

15世紀の最後の十年間に生まれたと孝えられているフランソワ・ラブレールは、時代的にはまさしくコロソのアメリカ到達に始まる大航海時代にその青春を送ったことになる。そして、1532年の『第二之書パンタリュエル物語』(以下『第二之書』と略す)に始まる作品の中には、アウエルバッハの言うように、「新しい世界の発見のテーマ」が鳴りひびき、「そのような発見の結果として伴う視野の移行、世界像の変化が、あらゆる驚嘆をこめて、ありありと見られる」⁴⁾

しかし、ラブレールが具体的に抱きえた世界像は、コロソのアメリカ到達以来40年を経過した時点にあっては、必ずしもそれほど明確ではないようだ。1534年に刊行された『第一之書ガングンチュワ物語』(以下『第一之書』と略す)の中に、レルネの城主ピクロコルが、暗愚な部

下たちに唆されて、世界征服を夢想する有名な章がある。⁹⁾ そこでピコロルが征服する世界は、西はスコットランド、イングランド、アイルランドまで、東はチグリス河、ブルガリア、ハンガリア、ロシアまで、北はノルウェー、スウェーデン、グリーンランド、氷海まで、南はチュニス、ビゼルト、アルジェ、ボナ、キュレネ等の北アフリカの地中海沿岸までであり、中世以来のヨーロッパ人に比較的親しい地域である。

また『第二之書』では、パンタリユエルは、父ガルガンチュワの要請により、ユトピー国に戻ることになるが、その航路はオンフルールを発ち、カナリア群島に寄港し、ブランコ岬、セネガル、ヴェルデ岬、喜望峰を経て行くものである。⁹⁾ Abel Lefranc が考えたように、⁷⁾ ユトピー国をこの航路の延長上のカタイ国に位置すると想定することはできよう。しかし、その場合にも、喜望峰までは非常に精確な航路が、それ以降も同様であり、Meden, Uti, Uden, Gelasin, Isles des Phées, le royaume de Achorteなどをアデンなどの実在の地名に結び付けるのは無理があり、ユトピー国は東方のいづれとも知れぬ地域にあると考えるのが妥当であろう。

このように1532年、1534年にそれぞれ刊行された『第二之書』『第一之書』に表されたラブレールの世界認識は、新大陸をアメリゴ・ヴェスプッチに因んでアメリカと命名することを提案したヴァルトゼーミュラー Waldseemüller が1513年に出版した世界地図⁸⁾の表すような世界認識に対応しているのではないだろうか。この地図は、同じ地理学者による1507年の世界地図よりは改善されたとは言え、ヨーロッパ主要部やすばらしく正確なアフリカを除けば、まだまだ不正確で、何よりインドより東は伝統的な地理感に従い空想的に描かれている。マレー半島が異常に大きく南に迫り出し、とりわけ現在の中国、ベトナムにあたる地域は形もプロポーションも不正確極まるものである。また新大陸については、キューバ島、エスピリオ島の他に、南アメリカ大陸の一部が描かれているにすぎない。

既に1522年にはマジェランの艦隊による世界一周が成し遂げられ、コルテスのメキシコ征服も1518年に開始され、フランスにあっても、1504年のゴヌヴィル等のブラジル到着、1508年のトマ・オベールのカナダ航海、1524年のヴェラツァーノの北米大陸航海などによって、世界認識が年々深化していた時代にあって、前期作品に見られる限り、ラブレールの世界観は、まだまだ大航海時代の初期の段階にとどまっていたと思われる。

1546年出版の『第三之書』以降のラブレールの後期作品に触れる前に、『第一之書』『第二之書』と後期作品を隔てる十数年間にフランスでおこった海外進出政策の変化に言及しておく必要があるだろう。前述したように、イタリア戦争にかかわっていたフランスは、王権が海外進出に消極的なこともあって、大西洋の彼方に出かけていくのは、大西洋岸のラ・ロシェルやサン・マロ近辺の漁民などの民間人であった。しかし、1520年以降ようやく王権も新航路の開拓に意欲を示すようになる。1524年以降4度に渡って試みられたヴェラツァーノのアメリカ航海の後、神聖ローマ皇帝との戦いによる中断を経て、1534年ジャック・カルチエ Jacques Cartier(1491-1557)による本格的な探検航海がフランソワ I世の全面的援助を得て行われる。

カルチエに与えられた最初の任務は、エスパーニャやポルトガルに独占されている東方貿易のための新しい航路を見出すために、「ヌーヴェル・フランス征服ならびに北方廻りカタイ航

路」の発見であった。こうして第一回遠征は1534年4月20日二隻の船、61名の乗組員でサン・マロを出発、20日余りで現在のニュー・ファウンドランド島に到達し、更にカナダ本土まで航行して、同年9月5日にサン・マロに帰港している。⁹⁾ この第一回航海が予備調査的性格を帯びていたとすれば、1535年5月19日にサン・マロを船出した第二回航海はより本格的なものであり、第一回航海で連れ帰ったカナダ原住民を含む総勢112人三隻の船での航海であり、砦を作り、カナダで越冬して、翌1536年7月16日にサン・マロに戻っている。この第二回航海の折りには、セント・ローレンス河を遡及し、この河がカタイへ通ずる水路ではないことを明らかにし、また第一回航海と同様、原住民の首長ドンナコーナを含む5名を連れ帰っている。また何より重要なことは、この第二回航海の記録が1545年にパリで刊行されていることである。¹⁰⁾ この二回の航海によって、カナダの様相が明らかになるにつれ、航海の当初の目的が変更され、第三回の航海は植民を意図したものとなり、貴族のジャン・ロベルヴァル Jean Roberval が総隊長となり、カルチエの船団は1541年5月23日にサン・マロを出帆、ロベルヴァルの本隊は準備に手間取り、1542年4月16日にラ・ロシェルを出航している。しかし、カルチエとロベルヴァルの連絡がうまくいかなかったせいか、カルチエ隊は1542年10月に帰還し、ロベルヴァルの本隊も食糧不足などで病人が続出し、1543年6月9日にはフランスへ帰国せざるをえなくなり、植民計画は失敗に帰した。

このようにラブレー作品の前・後期を分ける十数年間には、王権の海外政策の変化により、フランス自身が積極的に新大陸に進出し、それにとまって、原住民が連れてこられ、何よりもカルチエの第二回航海の記録が公刊されたことにより、新大陸に関するより直接的な知識がフランスにおいても増大したと思われる。そして、パンタグリユエル一行がパニユルジュが結婚すべきか否かをバクブックの神託に問うために航海に出る1548年出版の『第四之書』は、確かにこのような当時の気運をも反映しているように思われる。

Abel Lefranc の言うような¹¹⁾ ラブレーがカルチエに航海上の諸事について訊ねに来たかどうかは、大いに疑問の残るところではあるし、カルチエの名の見える¹²⁾ 『第五之書』全体がラブレーの手になるものかも通説上は否定的ではあるものの、『第四之書』に記されたバクブックの神託の下される北インドのカタイ国への航路や、¹³⁾ 『第五之書』の鐘鳴島とカルチエの航海記の鳥ヶ島の記述の類似¹⁴⁾ などから考えて、Chinard の指摘する如く、¹⁵⁾ ラブレーはカルチエのカナダ探検航海に示唆されて、パンタグリユエル一行にインドへの北廻りのルートをたどらせようとしたのであろう。その限りでは、Lefranc が1545年にバーゼルで刊行されたセバスチャン・ミュンスターの地図上に、パンタグリユエル一行の航路を描いたのは、首肯しうる。¹⁶⁾ この地図では、マジェランやカルチエの航海を受けて、南米大陸はマジェラン海峡とともに不正確ながら描かれており、北米については、フロリダ付近とヌーヴェル・フランス(カナダ北東部)は描かれているが、北米と北インド(India Superior)のつながりは、地図の左右で不明のままである。

けれども、ラブレーがカルチエから受けた影響は、この航海や鐘鳴島などのエピソードに限られており、Lefrancのように、メドモテ島をカナダと、結縁(アリヤンス)島の住民をエスキモーや北米インディアンと同一視するのは行きすぎであろう。¹⁷⁾ 『第四之書』以下の航海譚

はカルチエのカナダ航海に大枠を借りながらも、ブラングナリーユやアンドウイ族との戦いのようなエピソードを『パニルジュ航海記』¹⁸⁾ から借用し、また『第五之書』のランテルノワのエピソードなどはさらに遡ってルキアノスの『本当の話』から借りてきたもので、これらに、パニルジュの羊の話などのラブレールの素晴らしい想像力の産物を組み合わせたと語りべきであって、個々の島の住民は、シカヌウのような法律家を戯画化したものや、ガストロラートのようなラブレールの想像によるものであり、新大陸のインディオのイメージを反映したものではほとんどない。

しかし、この新大陸の住民のイメージがラブレールの作品中にほとんど現われてこないことにも、カルチエなどの当時の航海者の他者意識が微妙に関係しているとも言いうるのではないか。カルチエの航海記やコロンの『航海誌』を読むと、これら初期の航海者たちがいくつかの点で奇妙に一致していることに気がつく。(カルチエはエスパーニャやポルトガルの航海者と比べれば、初期の航海者とは言えないが、フランス人としては、初期の航海者である。) 第一に、航海者として当然のことであろうが、彼らの記述が自然、殊に地形や航路について、実際的なことであり、何よりも、航路などを数値化することが多く、また発見者として土地に命名することで、その土地を所有しようとする態度が見られる。第二は、コロンにあっては黄金を得ることと住民をキリスト教徒にすること、カルチエの場合には新しいインド航路の発見と黄金の獲得という、自己の目的への度重なる言及であり、そのために新大陸の住民はほとんどこの観点からのみ関心を引いているように思われることだ。コロンの航海誌では、インディオたちは、最初こそやや詳しく述べられるが、後には既述の部族と同様と記されることが多く、裸体であることが特に強調され(裸体はコロンにあっては非文明の明確な印である)、良きキリスト教徒になると決めつけられ、インディオが黄金を持っているかあるいはあるかを知っているかについて執拗に述べられる。またカルチエにあっては、さすがにコロンいらい数十年を経たこともあり、北米原住民の身体の記述もかなり詳細で、習俗、性質にも言い及び、種族・言語の区別も行い、ドンナコーナ首長などの何人かの原住民の固有名をあげている。しかし、カルチエの原住民に対する記述には、しばしば、見すばらしい身なりであるとか、恐ろしげであるとか、未開人であるとかの、自己の価値をそのまま投影したものがああり、原住民からの地理に関する情報にかなりの重点が置かれている。

第三は、Berthiaume がカルチエの物語について述べているアナロジーで、¹⁹⁾ コロンにあってはカルチエにあっては、新大陸の事物は彼らが慣れ親しんでいたカスティリャやブルターニュの事物との比較・類推において頻繁に語られている。そして、このような比較・類推は、Berthiaume の言うように、新世界と旧世界を対立させるためのものではなく、両者の相異を無化し、同一化するためのものであるように思われる。この点では、Berthiaume も示唆する如く、²⁰⁾ ラブレールの航海譚も同様であり、しばしばフランスやパリの事物が参照されている。

以上のような初期の航海者の態度は、トドロフの言葉を借りれば、²¹⁾ 自己中心主義であり、自分の価値観を他者に投影する同化主義と、優越と劣等をあらわす言葉に翻訳された差異意識との組合せであり、ラブレールの作品中に新大陸の住民のイメージがほとんど見られないことも、このような意識の反映として考えうるのではないか。

だが、ラブレーの作品中に新大陸の住民のイメージが皆無であるかと言うと、実はある特異なイメージが微妙な形で表現されている。それは cannibales 食人のイメージであり、ラブレーの全作品の中でこの語は8度使用されている。²²⁾ cannibales は、Sainéan²³⁾ や現代のフランス語辞書の示す通り、Caribi や Caraïbes の異形である Canibi から派生したエスパーニャ語の canibal に由来しており、元来はカリブ海の小アンティル諸島の原住民を意味していたが、これらの部族が食人種であったために、食人種一般を示すようになった。コロンは第一回航海では、直接見たのではなく話を聞いただけであるのに、この食人の風習に余程驚いたのか、航海誌で幾度となく言及しており、第二回航海では直接その風習に接している。²⁴⁾ ヨーロッパ人にはこの食人のイメージが非常に強く刻まれ、²⁵⁾ 1544年バーゼルで初版が刊行されたセバスチャン・ミュンスター『世界誌』においても、「アメリカ大陸の住民は、食人種だけであるかのように記され、ふたりの食人種が、台の上で人間を叩き切っている画までが挿入されていた。²⁶⁾ またフランスでも、偶然ブラジルに漂着した後に帰国したピノ・ポーミエ・ド・ゴスヴィル Binot Paulmier de Gonneville がルーアンの大提督府事務所に1505年に提出した『正真正銘の陳述』に、彼の地の「インド人」が情け知らずの人喰い人であるとの記述がみられる。²⁷⁾

さて、ラブレーの『第四之書』の1552年版に付された「難句略解」では、Canibales は「アフリカの恐ろしい住民で、犬のような顔をしており、笑う代りにはえたてる」²⁸⁾ とされている。しかし、この「難句略解」がラブレーの手になるものか今なお疑問の残るところでもあり、²⁹⁾ 『第一之書』に示された <<des Isles de Perlas et Canibales>>³⁰⁾ のペルラス島がパナマ運河河口近くの群島であるならば、カンニバルの島はやはりアメリカ大陸近くの島と考えるべきであり、³¹⁾ 『第一之書』には <<Barbares de Spagnola>> (「エスパニョラ島の蛮人」)³²⁾ という表現も見えるのである。ただ、「犬のような顔」という表現はコロンの記述「犬のような鼻面」と対応しているのかもしれない。

ラブレーの作品の中で、この新大陸の食人たちは、具体的なイメージを伴って、アメリカ大陸に関係づけられている訳ではない。上記の例と『第二之書』第二十三章(1532年版)の例³³⁾を除けば、『第四之書』第三十二章の場合のように、³⁴⁾ 偽善法師や似而非信者と並べられ、その非人間性、恐ろしさを強調するために用いられており、1537年頃出版されたと思われる *Contes Amoureux* の場合³⁵⁾ と同様であると考えられる。

以上のように、ラブレーの作品は、当時の世界認識に基づいており、カルチュによる新しい航路の発見なども採り入れ、新大陸の住民の極端なイメージである食人を指すカンニバルの語も用いてはいる。しかし、これらは、直接的にアメリカ大陸に結びつけられることは少なく、あくまでも作品の一つの構成要素として扱われている。その意味で、Chinard の言うように、新大陸の驚異なものはラブレーの関心を引いたけれども、生物や住民は殆ど関心をひかず、³⁶⁾ ラブレーの他者意識は、まだまだ中世的なものを根強く残していたと言えるのだろう。

フランスでカナダ方面への探検航海がなされ、ラブレーの作品が出版されている間にも、コロンに始まるエスパーニャ人によるカリブ海諸島やメキシコ、南アメリカへの進出は続き、イ

ンディオとの関係も新たな局面をみせていた。既にコロンは第一回航海で、キューバ島、エスパニョラ島に達し、1498年の第三回航海では、ベネズエラ本土に達していた。そして、1511年頃までには、カリブ海の諸島は征服され、1509年にはハマйка（ジャマイカ）島の植民が開始されていた。1517年のフェルナンデス・デ・コルドバのメキシコ発見に続いて、1518年にエルナン・コルテスのメキシコ遠征が始まり、1521年にアステカ王国が完全に征服されたあと、1528年頃までにグアテマラやユカタン半島方面がエスパーニャ人の支配下となった。一方1524年のフランシスコ・ピサロの第一回ペルー探検に始まるインカ帝国征服は、1532年インカ皇帝アタワルパが捕らえられたことで完了し、エスパーニャ人は1541年にはアマゾン低地へ進出していた。

このような侵略、植民に伴って、エスパーニャ人は多くのインディオを殺害し、またコロンは第二次航海の際にエパニョラ島の住民を捕らえエスパーニャに送らせたところ、奴隷として処分され、既にインディオの奴隷化が始まっていた。その後の征服者、植民者のインディオを奴隷として使役しようとする動きに対して、エスパーニャ王権は、インディオを国王の臣下であるとし、一定の人数を植民者に割り当て、改宗と保護を委託し、その代償としてインディオ使役の権利を与えるエンコミエンダ制を1503年に実施し、一定の制限を加えたが、実情はインディオの奴隷化を阻止することではなく、強制労働を合法化するものとなった。³⁷⁾ しかし、聖職者の反対もあってか、1512年にはブルゴス法が公布され、エンコミエンダ制の存続は認められ、インディオを自由な人間として規定するなど、インディオの権利について一定の進歩が法規上は見られた。³⁸⁾ それ故エスパーニャ人も何の根拠もなくインディオたちに戦いを挑むことは出来なかったが、パラシオス・ルビオによって作成されたレケミエント（勅降状）の朗読手続きを踏むことで、インディオに対する戦争を、キリスト教化に対する妨害の排除として、1514年以降一方的に正当化していた。³⁹⁾ その後1537年6月9日にパウルス三世の勅書によりインディオが真の人間であると認められ、後述するラス・カサスらの努力も与かって、1542年にはインディオの奴隷化を禁止する所謂「新法」が公布されたが、1545年にエンコミエンダ廃止に関する条項は撤回されてしまった。⁴⁰⁾

以上のようなインディオの奴隷化の背景にあるのは、後に見るセプールベダなどに典型的に露になっている、大部分のエスパーニャ人植民者、征服者の抱いていた、インディオは非文明的で野蛮でキリスト教徒より劣っているという意識であろうが、⁴¹⁾ コロンと同じ段階にとどまっていた訳では必ずしもないようだ。例えば、アラスカ王国を征服したエルナン・コルテス Hernán Cortés (1484-1547) は、アラスカ王国の首都テノチティランの規模に驚き、その住民の「仕事ぶりやふるまいかたには、エスパーニャ人の生活のしかたとほとんど変わることがなく、同じような秩序と調和がある」と記述しており、コルテスがメキシコを征服することができたのも、メキシコ人の諸部族の間にある内紛を知り、それを利用して一部の部族を自分の指揮下において、アステカ皇帝モクテスマに対抗させたからだ。しかし、コルテスは、トドロフの言うように、⁴²⁾ インディオを優れた事物を生産し、見事な技量を発揮する限りにおいて感嘆を誘う主体とした考えるが、相変わらず自然の驚異の中に教え上げ、私と同等のものとは決して見なしていない。

しかしながら、エスパーニャ人によるインディオの奴隷化に対して反対する人も幸いに存在した。エラスムスのユマニズムの影響を受けたバスコ・デ・キロガ Vasco de Quiroga (1470頃 - 1565) はインディオは人類の初期の黄金時代のような汚れない性質の人間であるとの認識にたち、現実的な解決策としてエンコミエンダ制は残しながら、トーマス・モアの『ユートピア』に倣ったオスピタルをメキシコのサンタ・フェに建設していた。⁴⁴⁾ けれどもインディオの権利擁護のために努力したエスパーニャ人としてラス・カサス Bartholomé de las Casas (1474-1566) の名を挙げない訳にはいかない。クリストバル・コロンの第二回航海に参加した父を持つラス・カサスは自身もエスパニョラ島へ渡り、反乱を起こしたインディオの鎮圧に参加したこともあったが、1514年と1524年の二回の回心によって、ドミニコ会修道士となり、インディオを平和裡に改宗させようと幾度となく試みたあと、インディオを奴隷状態におくエンコミエンダ制の撤廃に向けて生涯を捧げた。彼の名を今日まで残し、当時のヨーロッパ中に広めたのは、1550年のセプールベダとの論争と1552年に出版された『インディアスの破壊に関する簡潔な報告』⁴⁵⁾ (以下『報告』と略す) であろう。ローマ教皇に仕えた後、生地エスパーニャに戻りフェリペII世の宮廷にはいったセプールベダ Juan Ginés de Sepúlveda (1489?-1573) は、エスパーニャ人の新大陸征服を正当化するために、『第二のデモクラテスもしくはインディオに対する戦争の正当原因についての対話』⁴⁶⁾ を1544年頃に執筆した。そこでセプールベダは、アリストテレスやトマス・アキナスなどの権威を援用しながら、理論的レベルでは、より優れたものがより劣ったものを支配するのは正当かつ有益であり、もし劣ったものが従わなければこれを武力で支配することは正当であると主張し、また事実認識のレベルでは、インディオは愚鈍で理性に劣り、文字も持たず、法律もなく、放埒な生活を送り、人身犠牲や偶像崇拜などの悪しき風習に染まっているから、思慮分別に優れた勇敢なエスパーニャ人に従うのが当然であると断じている。この論の出版禁止を求めて行ったラス・カサスの運動が契機となり、1550年カルロスI世(神聖ローマ皇帝カールV世)の審議会でセプールベダと、インディオはアリストテレスの言う自然奴隷ではないしインディオに対する戦争は不当であるとするラス・カサスは全面的に対決する。⁴⁷⁾ その後ラス・カサスは、1541年にカルロスI世に提出したインディオの悲惨な状態とエスパーニャ人の征服を告発する報告をもとに、『報告』を1552年に出版し、所謂キリスト教徒が忠実、謙虚で温厚な、また「明晰で物にとらわれない理解力を具え、(中略)カトリックの信仰を受け入れ、徳高い習慣を身につけるに足る能力を持ち合わせている」⁴⁸⁾ インディオに対して仕掛けていた戦争を鋭く批判した。この書はエスパーニャを非難するヨーロッパ各国の思惑とも相まって、16世紀中にラテン語をはじめヨーロッパ各国語に翻訳され版を重ねた。『報告』はポレミックな書であり、インディオが一方向的に善良なものとなされ、殺害されたインディオの数は正確とは言えないし、インディオの死因として最大のものである流行病についても触れてはいない。しかし、そうした欠点は、現に目撃したインディオの悲惨をなんとか食い止めようとの気持ちからでたものであり、エスパーニャでは、インディオを絶対的な同一性にやがては吸収される差異として認めるような意識を持つラス・カサスのような人も出現していた。⁴⁹⁾

話をふたたびフランスに戻すと、1526-27年頃のヴェラツァーノのブラジル航海以来、ブラ

ジルとの交易が民間レベルで行われるようになっていた。この交易の成果なのだろうか、1550年10月1-2日のアンリII世のルーアン入市式では、大規模な「ブラジル生活情景」のページェントが行われ、ブラジルからやって来た人々が参加した。⁵⁰⁾ このようなアメリカ原住民の野外フェスティバルへの参加はフランス人のエキゾチスム刺戟したらしく、Chinardによれば、⁵¹⁾ 1544年のシャルルIX世のトロワへの入市式でも、1565年のボルドーでも見られたらしい。またロンサールなどのプレイアッドの詩人の作品にインディオの姿が文明に対する未開の権利を擁護する形で描かれているという。⁵²⁾

1555年に始まるヴィルガニオン Nicolas Durand, seigneur de Villegagnon (1510?-1571)のブラジルはリオ・デ・ジャネイロへの入植の試みからは、二つの記録が生まれた。ヴィルガニオンの航海に同行した、後の王付修史官・地誌官テヴェ André Thevet (1504?-1592)は、1556年1月には早々と帰国の途についたが、1557年には図版付の『南極フランス異聞』⁵³⁾を出版して、ブラジルでの見聞を世に広めた。原タイトルが示す通り、テヴェは自身の見聞した驚異なものを並べたてており、その中でブラジルの原住民の外観、習慣をかなり詳しく記述している。彼はただ単に自身の見聞を書き記すだけではなく、自身でその珍しい習俗に考察も加えており、原住民に対しても、未開、野蛮、不作法、非理性的だとする一方で、誠実に働く点や魂の不滅を信じていることでは、同時代のヨーロッパのある種の人々よりも良いぐらいだとまで評価しており、しばしばキリスト教以前の古代人との比較も行っている。しかし彼にとってインディオはあくまで歴史的パースペクティブにおいてとらえた時に評価しうるものであり、未開で野蛮な異教の者たちも、キリスト教化され、理性的になることで文明化するとする。こうした意味からエスパーニャ人がインディオを奴隷化したり、コルテスがテミスティタンを破壊したことも正当化され、「かつては残忍非道であった住民たちも、時が移った今日ではすっかり暮らし方や態度が変わり、現在では親切で人間らしくなり、かつての非文明的で非人間的な悪習、たとえば互いに殺し合ったり、人間の肉を食べたり、血縁や近親関係をまったく顧慮することなく手あたりしだいの女と寝るといったようなさまざまな悪徳や欠点は、すっかり忘れ去られてしまっている」⁵⁴⁾とされる。

一方、ヴィルガニオンからカルヴァンに宛てた援助を求める書簡に応じて1556年11月にオンフルールを出帆し、1557年3月から翌年1月までリオ・デ・ジャネイロに滞在した後帰国したカルヴァン派の牧師レリー Jean de Léry (1534-1613)は、テヴェに反論する意図もあって、1578年に『ブラジル旅行記』⁵⁵⁾を出版する。レリーはテヴェよりも長く滞在し、原住民との交流も多かったのであろう、現地のトゥピナンバウ族の様子や驚異のものを、帰国から大分年月が経たことも与かったのだろう、あまり私情を交えずにかなり冷静に、時にはテヴェを批判したり、ロベス・デ・ゴマラの『インディアス史総論』のアメリカ大陸の他の部族の記述と比較したりしながら、詳細かつ具体的に述べている。彼もまたトゥピナンバウ族の未開で残酷な面を指摘すると同時に部族内での友愛やフランス人に対する手厚いもてなし等の良い面をも記述する。そして、残酷な面の代表として引き合いにだした食人の様子を詳しく述べたあとで、ヨーロッパで行われている残酷な事例を持ち出し、「どうか今後は、食人未開人、すなわち人間を食う未開人のことを、闇雲に忌み嫌わないでいただきたい」⁵⁶⁾と、原住民の残酷さを相対化す

るようなことまで行いが、こうした態度の背後には1562年のヴァシーの虐殺によって始まったフランス国内での宗教戦争、とりわけ改革派であるレリーにとっては忘れがたい1572年のサン・バルテルミーの大虐殺でのカトリック側の残虐な行為を非難する意図があったであろう。

結局ヴィルガニョンのブラジル植民は、1560年にポルトガル人の攻撃を受けて失敗し、その後1562年から三次に渡って行われたフロリダへの遠征、植民計画も、エスパーニャ人の襲撃によって惨めな結末を迎え、宗教戦争に突入したフランスは16世紀中には海外へ手を伸ばす余裕はなかった。

以上のように見てくると、1580年に初版が出版されて1592年の死まで書き継がれた『エセー』の中で、モンテーニュが新大陸の住民について幾度となく言及しているのも、何ら不思議ではない。もっとも次のような言葉を聞くと、モンテーニュの地理認識はまだ我々のものと同一であるには程遠かったことがわかる。

「そのうえに、当代の航海者たちはこれ（＝新大陸：論者注）が島ではなく、一方でインドと他方で南北両極下にある大地とつながっている大陸であることを既にほぼ明らかにしている。あるいは、もし離れているとしても、それはごく狭いものだから、そのことで島と呼ぶには値しない。」⁵⁷⁾

このように、モンテーニュはまだ新大陸を中世のヨーロッパ、アフリカ、インドの世界の三区分でいうインドの一部と考えているかのようであり、『エセー』の中でも、新大陸は「新インド」（I, 23, p.109; II, 18, p.667）「エスパーニャのインド」（II, 8, p.390）「エスパーニャ人によって我々の父の時代に発見された新世界」（II, 12, p.497）「西インド」（II, 12, p.573）、或いは単に「新世界」や「インド」と呼ばれ、メキシコ、ブラジル、ペルーという地名は現れても、アメリカという語は一度も用いられない。そして新大陸の住民も「インド人」と呼ばれることもあり、アメリカのことを指すのかどうか注意が必要である。

さて『エセー』の中でのインディオのイメージを調べる前に、モンテーニュがこれらの知識をどこから得たかをみてみよう。第一は『エセー』の中でも述べられているインディオとの直接的接触であり（I, 31, pp.213-214; II, 12, p.467）、これは1562年ルーアンでのことと考えられている。⁵⁸⁾ 第二はI巻31章で述べられている、ヴィルガニョンが上陸した南極フランスと名付けられた地方に十年か十二年も住んでいたことのあるモンテーニュの家の使用人とこの男が引き合わせてくれた水夫や商人からの伝聞である。そして、第三に書物から得た物ということになるのだが、Villey-Saulnier 版によればこうした出所として、ロベス・デ・ゴマラの『インディアス史総論』の仏訳、⁵⁹⁾ 同じ著者の『コルテス卿物語』のイタリア語訳、⁶⁰⁾ ベンゾーニの『新世界新史』の仏訳⁶¹⁾ などが確実なものとされている。テヴェヤレリーの名は、同版の注では読みえたと可能性は残しながらも、確証はないようだ。⁶²⁾ しかしながら、同じフランスで同時代に出版された書物を蔵書家のモンテーニュが読まなかったとは考えにくいし、Nakam が示唆するように、⁶³⁾ I巻31章で批判されている cosmographe はテヴェだと思われるふしがあり、⁶⁴⁾ 同じ箇所の捕虜の死を描いた絵⁶⁵⁾ なども今後調査される必要があるのではないだろうか。

『エッセー』で新大陸に言及されるのは、多くの場合、蜘蛛を常食とする（I, 23, p.109）とか、裸体で歩き回る（I, 36, p.225）とかなどの珍しい事例としてである。これらの事例は、しかしながら、大部分ギリシア、ローマの古代の事例と並べられ、特に批判的観点から見られる訳ではない。むしろ、事物を色々な角度から眺めようとするモンテーニュの姿勢の現れとして、事例を収集しているのだと思われる。その上、上の蜘蛛を常食とする場合には、「これらの外国の（エトランジュ）事例は奇怪（エトランジュ）ではない」（I, 23, p.109）と付け加えたり、人身犠牲に触れた折（I, 30, p.201）には、インディオの勇氣、果敢さの実例も示すなど、読者にとって受け入れがたいと思われる事例には、これらを特別なものと思わせないよう配慮をしておき、インディオたちに好意的と言ってもいいぐらいである。このようなモンテーニュの思考の背景にあるのは、トドロフも言うように、⁶⁶⁾ 習慣に対する相対的な見方であり、モンテーニュ自身も「各国間の風習の違いは、その違いによって私を喜ばせるだけである。各々の風習はその理由がある。」（III, 9, p.985）と書いている。従ってI巻23章（I, 23, p.112）で述べられているように、野蛮人は、我々が彼らにとって不思議であるのと同じ程度に、我々には不思議なものなのだ。このような習慣に対する相対的意識は、モンテーニュ自身の気質や宗教戦争でのフランス国内が殺し合っていたという時代背景から来るものでもあろうが、旅の経験からも来ていると思われる。

「以上の理由のほか、旅は有益な訓練だと私には思われる。精神は旅の間未知の新しいものに注目する訓練を絶えず行う。そして、しばしば言ってきたように、精神に不断にかくも多くの生活、思考、習慣を提供し、我々の本性の絶えず変化する形を味あわせることほど、生活を形成するのによい学校を私は知らない。」（III, 9, p.973-974）

最後に、新大陸の住民をめぐってまとまって書かれた二つの有名な部分、I巻31章の「食人種について」とIII巻6章の「馬車について」の後半分を、紙幅にも論者の能力にも余裕がないので、ごく簡単に触れておこう。

I巻31章「食人種について」はブラジルで十数年生活して帰国したというモンテーニュ家の使用人の話として、彼の地の食人種の日常生活、戦争、結婚形態などのありさまをかなり詳細に述べたものだが、Villey-Saulnier 版の注が指摘するように、テヴェやレリーの書物にも類似の記述が見られる。ここでもモンテーニュは、このブラジル人の「野蛮」な風俗（特に食人の習慣など）を「自分の習慣でないものを野蛮と呼ぶのでなければ」（I, 31, p.205）そこには野蛮なものは何もないとか、フランスの宗教戦争での残虐を示しながら、生きた人間を食う方が殺して食うより野蛮だ（I, 31, p.209）とか主張して、ブラジル人を弁護する。いやそれ以上に、彼らが自然の徳や特性をよく保持しているのに、我々の方はそれを変質させたとして、理想化すらしているのだ。こうしたイメージが一人歩きしたときに、「善良な野性人」という神話が生まれたと考えられるが、このI巻31章に関しては、少し注意が要るようだ。それは、この章のパラドクスな調子であり、自分は単純で朴訥な使用人から聴いたので信用できるとか、パンの代わりになるものを自分でも味わってみたとか、現に自分の家にはブラジル人の使用していた寝具などの見本があるとか、章末尾の、ブラジルから来た未開人と長く話したとかいう、ことさら経験を強調するやりかたや、最後の「ブラジル人たちは半ズボンをはいていな

い」という言葉などに強く感じられるのである。それ故、この章をルネサンスのパラドクスのジャンルの好例、修辞と見なす者もいる。⁶⁷⁾

III巻6章「馬車について」では、前半の古代ギリシャ、ローマの馬車の話などに続いて、新大陸のことが語られる。ここでは、エスパーニャ人の奸計や策略を用いた侵略の例として、レケミエントを述べる場面やペルー王とメキシコ王の降伏の場面などが述べられる。これらの出所はバタイヨンが明らかにしているように、ロペス・デ・ゴマラであり、バタイヨンはロペス・デ・ゴマラが元にした Enciso からモンテーニュまでのテキストの推移を見事に示している。⁶⁸⁾ さらにバタイヨンはモンテーニュがエスパーニャ人の侵略を正義や布教のためだけではなく黄金を求めてであったととらえていることをテキストの構成において示しており、実に興味深い指摘である。この部分は、Etiemble の指摘するように、⁶⁹⁾ B版にほとんどその後の加筆もなく、インディオを善良、忠実、率直などとしているが、その調子には皮肉な感じは見えず、1586-1587年頃と考えられている執筆年代とも関係するのだろうか、Etiemble のようにモンテーニュがアンガジェしていたとまでは思われないが、エスパーニャ人に対する非難は真正なものに見える。

インディオに対する以上のようなモンテーニュの態度に、トドロフのようなその相対主義は、無意識の普偏主義を前提としているとする厳しい見方もあるが、⁷⁰⁾ セブールベダやオビエドのようなあからさまな差別思想が存在した16世紀にあっては、ラス・カサスの立場がキリスト教に基づく平等主義であるにせよ貴重なものであったのと同様に、やはり大きな一歩であったのではないだろうか。

15世紀末に「発見」された新たな「他者」のイメージは、16世紀を通じて、善良、純朴な野性人と、食人に代表される残酷、野蛮、非文明的な未開人との間で揺れ動いていた。ラス・カサスやモンテーニュのような人の存在にもかかわらず、インディオについての知識の増加は必ずしインディオにとって幸いに作用したとは言いがたい。ここに「他者」を理解し共生することの困難が存在するのだろう。そしてこのことは、現在の我々にとっても依然として大きな課題であるように思われる。

(1993.10.31)

註

- 1) 池上俊一、『狼男伝説』、朝日新聞社、1992。とりわけ第四章「他者の幻像」はヨーロッパ中世の他者像について示唆されることが多い。
- 2) 『コロンブス航海誌』、林屋永吉訳、岩波文庫、1977、p.9。
- 3) カルチエ、テヴェ、『フランスとアメリカ大陸(一)』、二宮敬他訳、岩波書店、1982、所載の二宮敬氏による解説、p.538。
- 4) E. アウエルバッハ、『ミメーシス』(下)、篠田一士・川村二郎訳、筑摩書房、1967、p.12。
- 5) François Rabelais, *Gargantua*, Droz, Minard, 1970, pp.193-201。以下『第一之書』への言及は全てこの版によりG.と略記する。
- 6) François Rabelais, *Pantagruel*, Droz, 1965, p.130。以下『第二之書』への言及は全てこの版によりP.と略記する。

- 7) Abel Lefranc, *Les Navigations de Pantagruel*, H. Leclerc, 1895, (Slatkine Reprints, 1967), pp.17-23.
- 8) Numa Broc, *La géographie de la Renaissance 1420-1620*, Les éditions du C.T.H.S., 1986, p.64 所載のものを参照した。
- 9) カルチエ、「航海の記録」、前掲『フランスとアメリカ大陸(一)』所載。以下当時の航海については同書所載の前掲二宮氏の解説に依る。
- 10) Jacques Cartier, *Brief Recit, & succincte narration, de la navigation, faicte es yslles de Canada, Hochelage & Saguenay & autres, avec particuliers meurs, langaige, & cerimonies des habitans d'icelles: fort delectable à veoir*, Ponce Roffet et Antoine le Clerc, 1545.
- 11) *op.cit.*, p. 60.
- 12) François Rabelais, *OEuvres complètes*, Garnier, 1962, Tome II, *Le Cinquième Livre*, p.401.
- 13) François Rabelais, *Le Quart Livre*, Droz, 1947, p.36. 以下『第四之書』への言及は全てこの版により、*Q. L.*と略記する。
- 14) *op. cit.*, pp.285-296. カルチエ、前掲訳書、pp.13-15.
- 15) Gilbert Chinard, *L'exotisme américain dans la littérature française au XVIe siècle*, Hacette, 1911, (Slatkine Reprints, 1978), p.77.
- 16) Abel Lefranc 前掲書所載の地図を参照のこと。
- 17) *op.cit.*, p.88, p.108.
- 18) *Le Disciple de Pantagruel (Les Navigations de Panurge)*, Nizet, 1982.
- 19) André Berthiaume, <<De quelques analogies dans les récits de voyage de Jacques Cartier>>, IN *Cahiers de l'association internationale des études françaises*, n. 27, 1975, pp.13-26.
- 20) *Ibid.*, p.24.
- 21) Tzvetan Todorov, *La conquête de l'Amérique La question de l'autre*, Seuil, 1982, p.58
- 22) J.E.G.Dixon, *Concordance des oeuvres de François Rabelais*, Droz, 1992, p.115. 書法上は Canibales が6回、Caniballes が2回となっている。
- 23) L.Sainéan, *La langue de Rabelais*, Boccard, 1922, tome deuxième, p.527.
- 24) コロンブス、アメリカゴ、ガマ、バルボア、マゼラン、『航海の記録』、林屋永吉他訳、岩波書店、1965、p.86.
- 25) 例えば、多木浩二、『ヨーロッパ人の描いた世界』、岩波書店、1991、pp.36-37 所載の1505年の木版画には人間の腕を食らう裸体のインディオの姿が描かれている。
- 26) 増田義郎、『新世界のユートピア』、中公文庫、1989、p.64.
- 27) 二宮氏上掲解説、p.525.
- 28) *Q.L.*, p.271. <<Canibales, peuple monstrueux en Afrique, ayant la face comme chiens, et abbayant en lieu de rire.>>
- 29) cf. André Tournon, <<La Brievfe déclaration n'est pas de Rabelais>>. IN *Etudes rabelaisiennes*, Tome XIII, Droz, 1976, pp.133-138.
- 30) *G.*, p.300.
- 31) Marcel Françon は別の見解をとっている。Marcel Françon, <<Rabelais et les canibales>>, IN *Bérenice*, 1, Lucarini Editore, 1980, pp.55-56.
- 32) *G.*, p.223.
- 33) *P.*, p.177.

- 34) *Q.L.*, p.152
- 35) Jeanne Flore, *Contes amoureux*, Presses Universitaires de Lyon, 1980, p.105. <<quelque autre inhumain Canibale mangeurs de gens>>.
- 36) *op.cit.*, p.78. <<Il(=Rabelais) a été attiré par ce qu'elles(=relations de voyages) présentaient d'extraordinaire; mais les animaux et gens (...) n'ont eu pour lui que peu d'intérêt.>>
- 37) 増田義郎、前掲書、p.117: 染田秀藤、『ラス・カサス伝』、岩波書店、1990、p.34.
- 38) 増田義郎、前掲書、p.138.
- 39) 染田秀藤、前掲書、p.64.
- 40) 増田義郎、前掲書、pp.229-232. 染田秀藤、前掲書、pp.193-202.
- 41) 例えばトマス・オルティスやオビエドは明白にインディオを不完全な人間として示している。cf. Tzvetan Todorov, *op. cit.*, p.191-193.
- 42) サアグン、コルテス、ヘレス、カルバハル、『征服者と新世界』、小池佑二他訳、岩波書店、1980、p.208.
- 43) *op. cit.*, p.168.
- 44) 増田義郎、前掲書、pp.213-222.
- 45) Fray Bartolomé de las Casas, *Brevisima relación de la destruccion de las Indias*. 邦訳 ラス・カサス、『インディアスの破壊についての簡潔な報告』、染田秀藤訳、岩波文庫、1976.
- 46) セブールベダ、『征服戦争は是か非か』、染田秀藤訳、岩波書店、1992、に所載。
- 47) 染田秀藤、前掲書、pp.256-275.
- 48) 『報告』前掲邦訳、pp.18-19.
- 49) Tzvetan Todorov, *op.cit.*, p. 212. <<... Las Casas, qui refuse de mépriser les autres simplement parce qu'ils sont différents. Mais il fait tout de suite un pas de plus, et ajoute: d'ailleurs, ils ne sont pas (ou ne seront pas) différents. Le postulat d'égalité entraîne l'affirmation d'identité, ...>>
- 50) Chinard, *op.cit.*, pp.105-106. レリー、ロードニエール、ル・シャルー、『フランスとアメリカ大陸(二)』、二宮敬他訳、岩波書店、1987、所載の二宮氏の解説、pp.649-654.、特に p.653 の図版を参照のこと。
- 51) *op.cit.*, pp.105-106.
- 52) *Ibid.*, pp.115-120.
- 53) André Thevet, *Les singularitez de la France Antarctique, autrement nommée Amerique: & de plusieurs Terres & Isles decouvertes de nostre temps*. 邦訳は前掲『フランスとアメリカ大陸(一)』に所載。
- 54) テヴェ、上掲邦訳、p.458.
- 55) Jean de Léry, *Histoire d'un voyage fait en la terre du Bresil, autrement dite Amerique*. 邦訳は前掲『フランスとアメリカ大陸(二)』に所載。
- 56) レリー、上掲邦訳、p.237.
- 57) Montaigne, *Les Essais*, édition de Pierre Villey, sous la direction de V. -L. Saulnier, P.U.F., 1965, (collection <<Quadrige>>, 1988), livre I, chapitre 31, p.204. 『エッセー』への言及は全てこの Villey-Saulnier 版により、通例にならってローマ数字で巻数を、アラビア数字で章数を示す。なおバタイヨンによればこの部分は後出ベンゾーニの仏訳者 Chauveton の加筆そのままであるらしい。Marcel Bataillon, <<Montaigne et les conquérants de l'or>>, IN

- Studi Francesi*, n.9, 1959, p.355.
- 58) 関根秀雄、『モンテニユとその時代』、白水社、1976、p.253.
 - 59) López de Gómara, *Histoire générale des Indes occidentales et terres neuves*, traduite en François par Fumée, 1584.
 - 60) *Id.*, *Historia di don Ferdinando Cortes*, tradotta nelle italiana per Agostino di Gravalix, 1576.
 - 61) Girolamo Benzoni, *Histoire nouvelle du Nouveau-Monde*, extraite de l'italian par M. Urbain Chauveton, 1579.
 - 62) *Les Essais*, p.1250 の注。
 - 63) Geralde Nakam, *Montaigne et son temps*, Nizet, 1982, (Gallimard, collection <<Tel>>, 1993), p.116. <<Il(=Montaigne) n'aime pas Thevet, et le dit assez explicitement dans l'essai: *Des Cannibales*.>>
 - 64) *Les Essais*, I,31, p.205 では cosmographe (地誌学者, 地誌官; テヴェは王の cosmographe であった) やパレスチナを見たことで世界のあらゆる土地について知ったか振りをする topographe (地理学者) が批判されている。
 - 65) *Les Essais*, I, 31, p.212 では捕虜が殺される場面の処刑者に唾を吐いたり、齧め面をしたりするところの描かれた絵を見たところとある。テヴェ『南極フランス異聞』(邦訳p.323)、レリー『ブラジル旅行記』(邦訳p.225) には、唾を吐いているとも齧め面とも見えないが、人物配置のよく似た捕虜撲殺の場面の挿画がある。
 - 66) Tzvetan Todorov, *Nous et les autres*, Seuil, 1989, pp.65-66.
 - 67) Joseph R. De Lutri, <<Montaigne on the Noble Savage: A Shift in Perspectiv>>, IN *French Review*, vol. XLIX, n.2, 1975, pp.206-211.
 - 68) Marcel Bataillon, *art. cit.*, pp.353-357.
 - 69) Etiemble, <<Sens et structure dans un essai de Montaigne>>, IN *C.A.I.E.F.*, n. 14, 1962, pp.263-274.
 - 70) Tzvetan Todorov, *Nous et les autres*, p.71. <<Il(=Montaigne) est universaliste, mais sans le savoir. ... ; il y a alors tout lieu de craindre que ses préjugés, ses habitudes, ses usages n'occupent la place non revendiquée de l'éthique universelle. La bravoure guerrière et la polygamie, le cannibalisme et la poésie seront excusés ou donnés en exemple, non en fonction de l'éthique universelle explicitement assumée, encore moins en fonction de l'éthique des autres, mais simplement parce que ces traits se retrouvent chez les Grecs, qui incarnent l'idéal personnel de Montaigne.>>